

国登録有形文化財

荒川家住宅



荒川家住宅 平成11年8月23日登録

荒川家住宅は、筑西市田町の国道50号線沿いに南面して店蔵と洋館が建っている。荒川家は現在酒店を営んでいるが、かつては醤油の醸造業を営んでいた。店蔵は、明治期の商店の様子を伝えるもので貴重な建物であり、昭和6年の道路拡幅の際、店座敷を廃し土間をひろげた。各蔵や付属屋は、いずれも丁寧な造りで内蔵壁面には鰻絵(こてえ)が描かれている。

○主屋(木造3階建、139平方メートル、昭和8年の建造物)

主屋は、荒七酒店の住宅部である。モルタル塗アールデコ調の洋館で方形屋根として、帝冠様式的雰囲気を感じさせる特異な外観意匠である。 ※帝冠様式：洋風の建物に和風の屋根を乗せた建物。

○店蔵(土蔵造2階建、99平方メートル、明治40年の建造物)

店蔵は、主屋の東に隣接する建物で土蔵造り2階建、棧瓦葺、東西棟で平入の店舗である。間口五間半、奥行三間で、正面に一間分の下屋を差し出す。2階正面は左右の戸袋部を除いて開口とし開放性の強い造りである。

○付属屋(木造平屋建、50平方メートル、大正初期の建造物)

付属屋は、主屋の北方背後につながる平屋建、棧瓦葺、寄棟屋根の建物で、内蔵とつながかたちで建てられた奥座敷である。中庭に向けて鉄板葺の庇を差出して座敷回りに廊下をめぐらす。

○内蔵(土蔵造2階建、50平方メートル、明治元年の建造物)

内蔵は、付属屋の背後にある南北棟で、棧瓦葺、切妻屋根の2階建の土蔵である。桁行四間、梁間三間妻入りの蔵で南面に黒漆喰塗りの観音扉を付け、奥座敷の廊下を蔵前とする。奥座敷側の壁面は松と鶴の鰻絵仕上げを施し丁寧な造りの蔵である。

○石蔵(石造2階建、83平方メートル、明治42年の建造物)

石蔵は、敷地の東北端にある東西棟で、棧瓦葺、切妻屋根の2階建の石蔵である。桁行五間、梁間二間半で、東面の開口部は、直線構成の額縁とり、雨除けの庇をつける。



茨城県筑西市教育委員会



【主屋（おもや）】

主屋は、昭和8年に建てられたもので、外見が洋風アールデコ様式、内側が和風というユニークな建築である。

一階は6畳の客間および9畳の仏間。二階は10畳と6畳の和室。三階は8畳と4畳半の客間となっている。

主屋の特徴は一階から三階までの通し柱が3本あり、自然災害への対策がとられている。また暑い夏に対処するために一階廊下の天井を開閉することにより風の流れを考えている。

【床の間】

床の間は、背面に窓を配した珍しい設計である。

窓は荒川家の家紋である「まつかわびしにだきみょうが」の図柄を取り入れた丸窓とし、置物を必要としないデザインとなっている。また、丸窓は開閉できるように設計され、部屋に明かり、風をうまく取り入れられるように造られている。



【磨きだし（みがきだし）】

近世末期の江戸での土蔵造りの標準的な工程は「24返し塗」と言われていた。荒打ち・砂ずり・大なおし・縄隠し・砂ずり・間樽巻・縄隠し・砂ずり・・・等、これだけでも気の遠くなる仕事だが、さらに「磨きだし」ともなれば大変なことである。

「磨きだし」は上塗りが半乾きになると「こて」でこすり磨きあげる。次に「このこ」をくるんだ絹布でこの上をはたく。漆喰の「あく」を左官用語で「くも」というが、この「くも」を手でこすって取り除き、この上をお湯でしぼった雑巾をかける。かけ終わったら今度は「からぶき」して湿り気をとる。ぬれたままに



しておくと、また粉がふくからである。このようにして「こて」と手で夜を徹してこすり、磨きあげ、美しい艶をだす。この「磨きだし」は、一人で一日にできるのは三尺角（一尺は約30cm）ほどにすぎないという。

【階段箒筥（かいだんだんす）】

階段の下空間を有効に利用する目的で、ひきだしや戸棚を取り付けた箒筥。

江戸時代の初め、狭い町屋に登場し、箱階段と呼ばれた。衣裳箒筥や商業用の箒筥が現れるよりも前から使われており、建物に取り付けて柱や壁と一体化したものと、移動できる置きタイプのものがある。



【奥座敷】

奥座敷は、大正初期に建てられたもので現在も客間として使用している。天井が高く、まわり廊下



をめぐらし、かなり贅沢な造りとなっている。

襖の横方向の棧は斜めに細工され、埃がたまらないように工夫されている。



【内蔵】

内蔵は、明治元年に造られた二階建の土蔵造りで、荒川家で一番古いものである。

冠婚葬祭を自宅で行う際に使用する漆器、陶器及び家具の収納蔵として現在も使用している。

入口の観音開きの土扉は火事に備えてのものであるが、これを造るには百人手間を必要とするという。



【鰻絵（こてえ）】

道具に鰻を使い、壁に漆喰で絵を描いた壁画である。大正時代の作品と思われる。茨城県内では数少ないという。

荒川家の鰻絵は白無地だが色彩を施したものもある。



【鬼瓦と影盛（かげもり）】

鬼瓦そのものはさほど大きくないが、それを取り囲むように塗り上げた漆喰が大きい。この部分を影盛という。屋号や家紋を入れた黒色の瓦と白漆喰という色の取り合わせは、人目を引く存在である。



このように大きな鬼瓦をのせる事になったのは、大棟にのせる箱棟の大きさに合わせる必要性からである。

関西の町家には、このような大きな箱棟はなく関東特有のものという。その理由は、関東の瓦は土質が悪く焼きも甘いので、雨水が染み込み易く、棟木の腐りを防止するために、このような箱棟形式の大棟を造りあげたとされる。

また、デーンと大きな鬼瓦と箱棟をのせることで、家主の誇りを高めたことは間違いない。

荒川家の鬼瓦には、荒七の屋号「ひだりかねうろこ」が見える。



【店蔵】

店蔵は、明治40年に建てられた土蔵造りで、一階は店舗、二階は10畳と8畳の和室からなっている。

この店蔵は漆喰が黒く塗ってあるが、費用が掛かる黒漆喰にすることで家格をあらわしているという。黒塗りは、後で白いのが目立つため墨を塗るという場合と、初めから黒漆喰で磨くのと二通りある。

江戸時代、黒塗りにするのは、江戸の町並みではあまりきらびやかにすると目を付けられるため、木材でも何でも黒く塗ったという。

